

南宋における一居士の精神生活

——如如居士顔丙の場合(一)——

永井政之

はじめに

如如居士顔丙について知られるところは、決して多くない。その撰述になる「初学坐禪儀」が、現在、神奈川県立金沢文庫に蘭溪道隆の「坐禪儀」と合帙収蔵されるところから、

納富常天「金沢文庫本坐禪儀について」(大倉山学院紀要二) 石井修道「金沢文庫資料全書一、禪籍編解題」(金沢文庫刊)

の関係二論文、さらに

椎名宏雄「宋元版禪籍研究(四)——如々居士語録・三教大全語録」(印仏研二九—二)

が知られる程度である。

このうち椎名氏の論稿は、京都大学図書館等に所蔵され
る、顔丙の二種の語録の本格的紹介とその異同等について論考された最初のものである。⁽¹⁾

本論考も、右の先達の論を受けた点が少なくなく、特に二

種の語録の関係などについては、椎名氏の論によるもので、資料の御提供にも預ったのであるが、いずれにせよ南宋に生きた特異な禅者である顔丙をめぐって、若干の論を展開するものとしたい。

ところで、顔丙の二種の語録のうち、一方の「如如居士三教大全語録」(以下「大全語録」)は明初の洪武一九年(一三八六)に刊行される。

中国でのことはともかく、日本での流布について椎名氏が、「流布した形跡はさらにな」いと断じ、その理由を、「本語録が、本邦では傍系とみられた大慧派の、しかも在俗者による、ほぼ三教にわたる通俗的な語録であることが、純粹性を尊ぶ邦人の関心を呼ばなかつたのであらう」とされる。

椎名氏の言は、ほぼ正鶴を射たものと思われるが、と同時に、筆者は「三教にわたる通俗的な語録」と見なされるが故に、この両種の語録にあらわれた顔丙の禪の立場を重要と考

える。

明初に刊行されたということは、元末明初の混乱から、国全体がようやく復興の途に着こうとしていた中で、宗教界も太祖の政策とも相い俟つて体制の側へ走り、そのような中で、編集成立したことに外ならない。

この場合、当然ながら顔丙の禅を三教一致の立場に立つものとみ甲集を基本としつつも、あえて、第二冊丁集卷四にあつたはずの——目録では明記するものの、京大本はこれを欠いている——三教論門を前へ移してきた編集者の態度、さらに、僧道を取り締りつつ、自らの政治に加担すべきを要求し、またそれに応じた宗教界の態度も考慮される必要があるかもしれない。

その問題はしばらく描くものとしたい。

ところで、本邦における語録の流布の程度は、椎名氏の言に従うものとし、では中国の場合はどうか。これも編者の意図とは裏腹に、大きく流布しなかつたことだけは断言できる。⁽²⁾それは灯史における記述の程度、あるいは後の大藏經編集に際して入蔵されなかつたことからも領ける。

なぜ顔丙の禅への関心は低いのか。決断は避けねばならないが、やはりそこには、中国における建て前と、本音の世界の使い分けが影響しているように思われる。つまり、顔丙の語録は、この時代の他の禅者のそれと比した時、あまりにも

「禅」の語録らしからぬのである。

もちろん、三教に対する考え方、禪淨一致の考え方、葬送に対する配慮など、いずれも顔丙の独創として位置づけうるものはない。しかし、あえて言うなら、「禅」の立場に固執する時、これら融合的態度は大々的に喧伝すべきものとは言えない。特に語録を遺すほどの立場にある人は、当人も、また編集の人もそれらの融合的な立場をできうる限り排除しようと務めたはずであるし、仮にそれらの面が打ち消えないなら、どのように禅の立場に集約するか、禅の価値判断の体系に組み入れるか、に腐心したはずである。⁽³⁾

その意味で、顔丙の語録は、本音を出しすぎていると判断されたのではないかと思われる。

とすれば、本音を出すが故に、顔丙の語録の存在は重要である。従来、禅と民衆のかかわりを論ずる時、その具体的な側面については、ほとんど知られないのに等しかった。

建て前が、あまりにも大きかつたからである。この建て前をつき崩してみた時、それは「通俗的」という評価を生むことになると同時に、当時の禅と民衆のかかわりのナマの姿が、朧気ながらもうかんぐると思われる。

さらに中国思想の流れに即して考えておくべきは、朱子との関係である。顔丙のデータを決定しえないにしても、顔丙と朱子が、ほぼ同時期の人であることは疑いない。しかも、

ともに福建の地にある。

朱子の場合は、福建省の尤溪県に生まれ、紹興一七年（一四七）、一八歳の時、建州で解試に合格、任官の次第によつて、任地に赴くことが多かつたにせよ、福建との縁が無くなつたわけではない。単純に考へるなら、両者が互いにその存在を知つていたとしても不思議はないようと思われる。しかし、両者はともに相手について、直接言及することはなかつたようである。一方は、一旦は禪を学んだとされつつも、結局は徹底的に禪を排撃し、一方は、儒を学びつつも、それを捨て、ついには三教の一一致を説くという立場をとる。

互いを知つていたか否かは別問題としても、ほぼ同時代に、いわば兩極端に位置する二人の立場は、考慮しておいてよいであろう。

顔丙伝考

ところで丹霞先生とも尊称されたらしき如如居士その人の伝記については、すでに指摘されるように、「増続伝灯錄」卷一に若干の機語があり、「禪燈世譜」卷五・「続伝灯錄」目録では名のみ記されると、いう程度で灯史の類の記述からは、ほとんど明確にならない。わずかに大慧宗杲（一〇八九—一六三）の弟子の雪峰可庵慧然の法嗣といふ程度である。ただ後世になると、顔丙に言及する資料も若干ながらみられる。たとえ

ば、同治一二年（一八七三）刊行の「延平府志」（三一）によれば、

顔丙は、如如居士と号す。順昌の人なり。宋末に鄉試に挙せらるるも、儒を棄てて釈に入る。元初、將樂の万安都を過ぐるに、下洞庵の毀るるを見、材を鳩め、将に建てんとす。欠くる所は惟だ正梁のみなり。張氏の墓の側に、合抱の梓、一有り。之を求むれども得ず。是の夕、風雨、之を抜き、因つて鬻して梁居士と為す。其の上に題して曰く、靈根育わづ、凡柴の混するを、天意、移し将つて、福地より来る。向日、親しく逢う、霹靂の手。今朝、果して作る棟梁の材。後、庵、復た圮る。正統の間、華僧興、復た之を新たにする。瓦礫の中に於いて旧の梁を得。外朽つるものは堅し。題する所の字墨、水に漬入するも没せず。居士に語錄、并びに六時淨土文有りて世に行わる。

顔丙号如如居士。順昌人。於宋末舉鄉試。棄儒入釈。元初過將樂万安都。見下洞庵毀。鳩材將建。所欠惟正梁。張氏墓側。有合抱梓一。求之弗得。是夕風雨拔之。因鬻為梁居士。題其上曰。靈根不肯混凡柴。天意移將福地來。向日親逢霹靂手。今朝果作棟梁材。後庵復圮。正統間。華僧興復新之。於瓦礫中得旧梁。外朽中堅。所題字墨。潰入水不沒。居士有語錄。併六時淨土文行於世。ほぼ同様の文意が、同治一〇年刊の「福建通志」卷二六三にも収録されるのをみると、清代末期の福建地方では、右のような伝説めいたものが流布していたのであろう。二つの地方志の記事は、顔丙の伝記を記す、数少ない貴重な資料と言える。しかし、これらは時代が下りすぎると、いう欠点を持つ

ており、やはり「語錄」の各所にあらわれた断片的記事を総合して、その伝記を考えるほかない。

ところで右の記事からすると、顏丙は順昌（福建省）を本貫とし、北宋末に一旦は科挙を受験するものの、ついにはそれを捨てて仏教に帰したという。これがそのまま事実とは言えぬまでも全く虚偽でないらしきことは、後述するような顏丙の三教觀からすれば、一応首肯しうるし、何よりも「如如居士坐化語錄」の愈聞中の序文が、

如如居士顔公は、少くして周礼を学し、切に志、功名に有り。俄かに水冷雲閑し、心を内典に究む、云々。

如如居士顔公。少学周礼。切有志於功名。俄而水冷雲閑。究心内典。

と述べることが、その左証となるであろう。

また、「如如居士語錄」（以下「語錄」）丙集卷一の「見雪峰庵」において、随侍僧愚進の述べるところをみよう。

居士、弱冠の余に於て、意を灯窓に留む。節夫の書を編むに因み、偶たま放筆の頃に於て、豁然として頓悟す。直に身心を尋覓するに不可得なるを了じ、大歡喜を生ず。後、雪峰の可庵禪師を詣ぬるに、未だ証せず。師、一見して便ち云く、甜桃の木を颶却し、山に尋ねて醋梨を摘むと。居士、去らず。富貴を享くるに、却て這裏に來り、箇の村僧に尋ねるは作麼。居士、遂に悟処を呈す。師云く、我、妄に説かず。我、居士の来るを一見し、預じめ、汝に這の事有るを知れり、果然果然。此は是れ居士、夙劫

に、海惠中より帶來するなり。我が門の禪和子、三二十、左江海上に走るも、你の這般の田地に到るを得ず。善く自ら護持すべし。今より後、但、本に依りて行ぜば、将来、愈いよ久しく、愈いよ明らかなり。居士答えて云く、這裏、本より拠るべきなし。師云く、恰かも是れなり。後、数日の間、師、却つて云く、我、你に一件の事を問わんと欲す。士云く、好し。師、二十余件の公案を挙して一句と作し、聞いて云く、你の悟処を拈却す。你、惣に作麼生。居士、一時に下語するも契わず。師、笑いて云く、你、這般の參禪、我が福州の人の蜻蜒の詩を作るが如くに相い似たり。蜻蜒蜻蜒、飛来飛玄して、曾つて停まらず。我に四翼を摘了せられ、恰も大鉄釘に似たり。師云く、我、適間分明に、你に箇の断情識底の刀子を与う、子、還て会すや。士、數日、肚腸不成と做りて所謂く、頌を作り語を下し、玄を談じ妙を説くに、自ずから其の罪なるを知る。一日、堂に上り、師に告げて云く、別人は參禪學道して得道す。某、此れ番來するも、却つて是れ折本なり、帰去せん。便ち問訊して退く。師云く、且喜す、參禪の長進することを。成侍者をして、夜に頌を送らしむ。曰く、赤體乾窮して窖子なし。胸中、富かに有り、五車の書。自ら颶下に従う、毛錐の後。活撥撥なること盤殊の如し。居士、辭して門を出ず。同行の黃道、士に聞いて云く、如何なるか是れ仏。答えて云く、聳漠の喬松、道を夾みて青し。当初、鳳山の円照和尚、士に勧めて云く、居士、既に得悟し了る。更に須らく人に見えて始め得べし。士、三たび山に回るに及び、頌を作して、以て之を謝して云く、把髻して衙に投ぐるの日、師の一刀を賜わるを蒙る。情と識とを断除し、仏と魔とを剝却す。饒い是れ本来の做なる

も、眉は合す八字の毛。知音、更に相い問わば、掌を撫ち笑うこと呵呵たり。師、之を肯う。

居士於弱冠之余。留意灯窓。因編節夫書。偶於放筆頃。豁然頓悟。直尋覓身心。了不可得。生大歡喜。後詣雪峰可庵禪師未証。師一見便云。颶却甜桃木。尋山摘醋梨。居士不去。享福富貴。却來這裏。尋箇村僧作麼。居士遂呈悟處。師云。我不妄說。我一見居士來。預知汝有這事。果然果然。此是居士。夙劫從海惠中帶來。我門禪和子三二十。左江海上走。不得到你這般田地。可善自護持。從今後。但依本而行。将来愈久愈明。居士答云。這裏無本可拋。師云。恰是。後數日間。師却云。我欲問你一件事。士云。好。師舉二十余件公案作一句。問云。拈却你悟處。你惣作麼生。居士一時下語不契。師笑云。你這般參禪。如我福州人。作蜻蜒詩相似。蜻蜒蜻蜒。飛來飛去不曾停。被我摘了四翼。恰似大鉄釘。師云。我適間。分明與你。箇斷情識底刀子。還會麼。士數日做肚腸不成所謂。作頌下語。談玄說妙。自知其罪。一日上堂告師云。別人參禪學道得道。某此番來。却是折本。帰去。便問訊而退。師云。且喜參禪長進。令成侍者。夜送頌曰。赤體乾窮無寄子。胸中富有五車書。自從颶下毛錐後。活撥撥如盤殊。⁽⁴⁾ 士辭出門。同行黃道問士云。如何是佛。答云。聳漢喬松夾道青。当初鳳山円照和尚勸士云。居士既得悟了。更須見人始得。及至三山回作頌。以謝之云。把髻投衙日。蒙師賜一刀。斷除情與識。剗却仏和魔。饒是未來做。眉合八字毛。知音更相問。撫掌笑呵呵。師肯之。

とあり、可庵に参する以前に、ある程度の感ずる処があつたらしい。可庵も、大概はこれを認めるかの如き発言をする。

ただし、顏丙の発言の一切を是認したわけでもない。肚腸不成となるほどの工夫が要求され、ようやく徹底したのである。

ところで、先の餘聞中の序文は、顏丙が若くして「周礼」を学んだと述べる。「周礼」そのものの成立を論ずることはできないが、ようするに、この書が政治改革に当り、その目標として置かれたという点は重要で、王安石（一〇二一～一〇八六）もこれを重視し、「周官新義」一六巻を著わしたという。

多分、一時代後に生れた顏丙は、王安石をはじめとした新法党による政治の挫折を知っている。それは理想と現実のうめ難い隙間を居士に感じさせたであろうか。「節夫の書を編む」の一段は、その感を深くさせる。

ちなみに、王安石は、晩年、南京の鍾山に隠棲して、「維摩經」「金剛經」「楞嚴經」の注を撰したといふ。顏丙が、「金剛經」に精通していたらしきことは、後述するとおりであるし、何よりも、その号である「如如」が、「金剛經」の「云何為人演説、不取於相、如如不動」の一段を連想せしめるところからすれば、顏丙の思想の中で、王安石の占める位置は在外大きいのかも知れない。

かくして、顏丙は官吏を嫌う。それは官吏そのものより、官吏の不正を嫌つたのかもしれないが、例えば「公門方便修行」では、「若し、人、己むを得ずして、權に公門に入らば、

常に方便の一宇を行じ、後代の子孫の長久の計と為せ」と言ひ、「人間の罪惡、是れ公門」とまで頌す。ここで言う「公門」は、士大夫層ではなくて、科挙を経ない下級官吏（胥吏）をさす言い方であろう。彼らの腐敗ぶりは、各種の小説類にしばしば現われる。

顔丙が、科挙を断念するのは、そのような「節夫」でない人が実権を握る、当時の政界への失望があつたのではない。

ところで、帰仏し可庵の印証を受けてからの顔丙が、どの

ような参考の過程を経たかは、実はあまり明確ではない。

〔語録〕甲集、卷四には、「雪峰可庵印証頌」が収録され、また「雪峰禪和子贊居士參可庵」は、顔丙と可庵の機縁の契うこと、あたかも韓愈と大顛のことであると讃えるのである。これよりするなら、顔丙と可庵の師資関係は、周囲の人々も認める動かし難かつたものと思われるが、顔丙は、可庵一人に参ることで大悟し、修行の上での他への遊方はまったくなかつたと推測してよい。

次に、その後の顔丙の動向をみるために、〔語録〕丙集に収録される「見雪峰庵」「見府中即庵」「見雪峰一大禪」「見福泉尊宿」の記事を総合してみよう。

府中の即庵に見ゆ

後、郷に帰ること数十年、少しく、知音の此の道を語るべき者有

り。免れず、建寧府に到り、即庵和尚に見ゆ。即庵は、乃ち靈隱密庵の上足なり。士、門に入るに、師、便ち問う、船にて来るや、歩にて来るや。士云く、現に到れり。師云く、途中に涉らざる一句作麼生。士云く、蒼天蒼天。師云く、猶お程途に渉ること在り。士云く、和尚、裏水漉漉地と云えり。師、火閣の小倉の間に請い、又問う、聞く、居士、金剛經を講ずと、是なりや。士云く、不敢。師云く、如何なるか是れ四句偈。士答えて云く、即日、恭しく惟みるに、和尚、尊候、動止万福。師云く、此は猶お是れ第二句なり。如何なるか是れ第一句。士、面前の様子を将ちて棹出す。師云く、元来爻、元來爻、云々。

閩府城、居士に請いて水西の円容庵に就かしむ。士に煎点を請うも、却つて即庵の相伴を請う。大衆、既に集る。師、袖中より頌を出し、以て之に贈り、普く大衆に呈す。頌に云く、之乎者也、忽ち三教に傍通す。由來、惣に一同す。欄柵を倒着し、畏帽を翻えす。更に何れの処にか龐公を負めん。

雪峰の一大禪に見ゆ

居士、向來、本邑の胡宰の処に在りて、館と作す。俊和尚有り、士を招きて云く、幸いに雪峰此庵の、此に在るに遇う。普説を請うべし。士、出て之を宝月庵に訪ぬ、云々。

福・泉の尊宿に見ゆ

初め福州の西禪に到り、中庵老師に見ゆ。士、作礼す。師、策住して云く、消得せざれ。士、堅く礼す。師云く、好し好し、因りて我れ你を礼するを得たり。……士、泉州に到り、初め一老僧に見ゆ。僧、聞いて云く、喚びて如如と作せば、早に是れ変じ了れり。士云く、眉は八字に分れ、鼻孔は下垂せり、云々。

見府中即庵

後帰郷数十年。少有知音可語此道。不免到建寧府。見即庵和尚。即庵乃靈隱密庵之上足也。士入門。師便問。船來歩來。士云。現到。師云。不涉程途一句作麼生。士云。蒼天蒼天。師云。猶涉程途在。士云。和尚云。裏水澆澆地。師請火閣小倉間。又問。聞居士講金剛經是否。士云。不敢。師云。如何是四句偈。士答云。即日恭惟和尚尊候動止方福。師云。此猶是第二句。如何是第一句。士將面前牒子棹出。師云。元來爻元來爻。（中略）

闔府城請居士。就水西円容庵。請士煎点。却請即庵相伴。大衆既集。師出袖中頌。以贈之。普呈大衆。頌云。之乎者也。忽旁通三教。由來惣一同。倒着欄袴翻畏帽。更於何處覓龐公。

見雪峰一大禪

居士向來。在本邑胡宰處作館。有俊和尚招士云。幸遇雪峰。此庵在此。可請普說。士出訪之於宝月庵。（中略）

見福泉尊宿

初到福州西禪。見中庵老師。士作禮。師策住云。不消得。士堅礼。師云。好好。因我得礼你。（中略）士到泉城。初見一老僧。便問云。喚作如如早是變了也。士云。眉分八字。鼻孔下垂。

以上、細かな問答は割愛したが、これにより、大凡の顔丙の動向が推察できる。

すなわち、得法後、故郷に帰つて数一〇年の間隠棲、のち建寧府に出て密庵の弟子の即庵、その帰依者の林居士と交流する。のち府城の人々が水西の円容庵に就いて煎点せしめようとしたが、即庵の相伴を請い、また宝月庵の此庵に普説を

請うている。さらに福州に出て、西禪寺の中庵を訪ね、泉州では一老宿との問答の後、多分「金剛經」を二一日に亘つて講じている。のち、「坐化語錄」愈聞中の序が正式には

如如大居士結夏邵武清涼禪院陞堂演法坐化語錄序

であること、さらに清涼禪院への請疏の文中に、牛頭山、獅子峰の名が見えることなどからすれば、その最晩年には、邵武県の牛頭山獅子峰にあつた清涼禪院に入ったのである。出家したことを述べず、またその語錄中、しばしば「居士」という呼称が記されることからするなら、顔丙は居士のままで入院開堂し、上堂し、雲堂で接化に励んだのである。

ところで「坐化語錄」に付される嘉定五年（一二一三）六月中幹日付けの朝散郎、前知叙州、軍州主管、勸農事、沿辺溪洞、都巡檢使、借緋魚袋の愈聞中の序文は、明らかに顔丙の示寂を前提としている。

聞中、符を蜀郡に解き、迹を丘園に遯ませり。万里に征塵して、談塵に接するを思い、一たび之を磨かんとす。公、廬を結び、徒を獅子峰頂に聚むるも、殆んど將に老いんとす。昼に三たび遣して、始めて臨み、日に七たび閱するも、遽かに逝けり。雲馭して茫茫たるがごとく、復た覗るべからず、云々。

聞中。解符蜀郡。遯迹丘園。万里征塵。思接談塵。一麾之。而公結廬。聚徒于獅子峰頂。殆將老焉。昼三遣而始臨。日七閱而遽逝。雲馭茫茫。不復可覩。

月の日付けであるが、最後の一巻となる雲堂での問答中、質問僧了善の語の中に「今朝六月一十五」の語がみえ、問答罷に端然坐化とある。愈聞中の序が手際よく纏められたと見れば——逆に翌年、あるいは数年後とみると、わずかな量の「坐化語録」の編集にしては、時間がかかりすぎることとなる——顔丙の示寂は、嘉定五年六月一五日のことと決定しうるであろう。

そのほか、「語録」已集卷三の「吉凶灯疏門」からみれば、いつの事かは判明しないが、長男を水の事故で喪い、女婿を喪い、六二歳の父を喪い、四人の子をなした七八歳の母を喪うなどの家族の様子も推測できる。⁽⁶⁾またかなりの毒舌家であり、皮肉屋でもあつたらしい。

一応、伝記の梗概をみたのであるが、不明な点がないわけではない。まず、「後帰郷数十年、少有知音、可語此道」という「見府中即庵」の記事から推測するなら、その前半生は、知音の人もなく、華々しい活躍もなかつたと考えてよく、諸方を参問するようになつたのは、晩年になつてからと思われる。この間どのような生業に就いていたのかも定かでない。

ところで問題の一は、密庵の弟子の即庵とは誰かというところである。「見府中即庵」では

不免到建寧府、見即庵和尚。即庵乃靈隱密庵之上足也。

と言う。「靈隱密庵」に注目するなら、それは、虎丘—応庵—密庵と次第する密庵咸傑（一一八一—一八六）の弟子の即庵ということになるが、密庵咸傑の弟子に即庵の名は見えない。

また「即庵」の二字からすれば、即庵慈覚があるが、この人は江西の雲居山に住し、密庵—破庵祖先—即庵と次第する人であるから、「密庵之上足」にはふさわしくない。

また「密庵」と呼ばれるのは、大慧下の密庵道謙がいる。若き日の朱子（一一三〇—一二〇〇）を接化したことと、夙に有名な道謙であり、径山に住した大慧に随侍したことは知られても、靈隱寺住持となつたことはなく、また、その会下に即庵の名を見出しえない。

つまり、「密庵之上足」とされる「即庵」について、確定するのは、今一つ資料が不足ということになる。さらに、即庵とともに煎点したという水西の円容庵についても、水西は多分、建寧府甌寧県にある円容庵ということにならうが、これも定かでない。

次に問題となるのは「此庵」についてである。此庵と言えば、大慧の法嗣で、福州の怡山西禪寺に住した此庵守淨が想起されるが、これも確定しえない。

次に、福州西禪寺に住した中庵とは、泉州晉江縣の法石寺に住した、大慧—晦庵弥光—中庵と次第する中庵慧空のこと

であろうが、この場合も、中庵が西禅寺に入つたか否かという点も定かでない。⁽⁷⁾

以上、関係する人々との否定的な面のみ列挙したが、例えば顔丙の世寿を、仮に、二〇歳前後に科挙に受験、可庵に得法して、数十年間隱棲という点から推して、五〇～六〇歳とみると、それは大慧の晩年の生誕ということになり、此庵守淨は年令的に無理があるとしても、中庵慧空や即庵慈覺については、可能性は大いに残されていて、早急な結論を出すことはできないであろう。

以上、顔丙の伝とその問題点をみた。不詳な点は少なくないが、顔丙が生涯、福建の地を離れなかつたことは確認できる。言うまでもなく、この地には、大慧が住した洋嶼の雲門庵があり、その会下の晦庵弥光、懶庵鼎需、蒙庵思岳、此庵守淨、開善道謙、玉泉曇懿、竹原宗元など錚々たる人々の開法の地である。

いわば大慧派の禅に席捲されたのが、この時代の福建と言えよう。顔丙の禪は、可庵の会下を離れて後も、大慧禪の中で生き、数一〇年の隠遁生活の中で醸成されたのである。

顔丙の三教觀

ところで、既述したように、顔丙は明初では明らかに三教一致論者として位置付けられる。それは顔丙の一方の語録が

「重刊増廣如如居士三教大全語録」と命名されることからも判然とする。それが当然ながら、語録そのものの内容に起因することは言うまでもない。

しかし、顔丙の禪を、三教一致のワクの中だけで捉えることが正しい把握なのかどうか、その点については、もう一度吟味して見る必要がありはしないか。

いったい、一口に「三教一致」と言つても、その該念規定は容易ではない。根底に儒仏道のどれを据えるのかという問題も遺ると言える。翻つて、「純禪の人」と一応規定したとしても、中国人という民族性から離れうるとは思えない。

何はともあれ、まず顔丙の三教觀を見ておこう。

顔丙の三教觀を知る手掛りとしては、「大全語録」卷上に収録される「三教一理論」に依るのが妥当であろう。その中で顔丙は言う。

綿团より硬く、鉄よりも軟かなり。六月の炎天、一点の雪。露柱灯籠、笑いて点頭す。啞子、夢を得るも、誰に向いてか説かん。古来より三教とは、強いて安名するなり。釈迦は、室を磨竭に掩い、夫子は、黙して之を識ると謂い、老聃は、大弁は訥なるが若しと謂う。直饒、剖破して一家と作すも、第二月に落在するを免れず。翻つて憶うに、東坡居士言く、尽く三教を把るも、俱に漏泄す、山色、豈に、清淨身に非すや、渙声は、便ち是れ広長舌と。便ち恁麼にし去れば、法堂前を持ちて、草深きこと一

丈に至るに非ず。尽法界、一人の湛えて種草を為すなし。従上の聖人、慈を具し、悲愍を運ぶも、世流、浪りに雲頭を第二門、浅近の処に掠下するを免れず。諸子を誘引して、古を去り、漸邈の時に当らしむるに、若し、為に一線の路を通せざれば、斯の民、詭譎の日甚しく、且つ將に、魑と為り、魅と為りて之かず。反りて、是れを以て、三聖人、同生し、周主の正教を盟う有り。儒教は、教うるに理を窮め性を尽くすを以てし、釈教は、教うるに心を明らめ性を見るを以てし、道教は、教うるに真を修し性を煉るを以てす。惟だ此の一事實のみにして、余の二は即ち真に非ず。是れ各人の胸中に、自ら三教有りて混然たり。切に、外に向うべからず、牛に騎りて牛を覗むるなり。故に前輩の云く、一僧一道一儒流、三人、共に話ること幾春秋。箇の何年の事を説くかを知らず。直に如今に至るも、笑い未だ休まず。此の詩、渾て一点の食煙火氣の味なく、始終、三教、負くことなし。齊家治身致君沢民と曰うが若きは、此は特に道家の粗迹なり。齋精養神飛仙上昇と曰うが若きは、此は特に儒者の余事なり。齋精養神飛仙上昇と曰うが若きは、此は特に釈氏の筌諦なり。吁、一字も三写すれば鳥焉成馬す。後世、伝え訛りて、將に三教と謂い、粗迹に止まる。往往にして虚に乗りて響を接ぎ、本を忘じて末を逐い、至りては、言戟交攻し、辭鋒競射す。豈、聖門を見ざらんや。有るは云く、我の賢なるや、人に於て何ぞ容れる所ならんや。況んや、三教の聖人、各おの門戸有るも、其の至極の処を要せば、未だ始めより一ならざるなし。是れ皆な、人の量を容ること能わざる所以なり。是れ已に人の言うに及ばざるなり。自己の性命

は、全く指して靈と為す、怪誕の語なり。終日、仮を喚びて真と為し、賊を認めて子と為す。毎日に、他の恩力を承くるに至るも、一点子の間着も、全く未だ正見正悟有らず。既に見悟なきも、一旦、翻身帰去せんす。且らく道え、路頭、什麼の処に向いて去る。転た見るに、痴の如く醉の如くして、下落するを識らず。是の如きの見解は、又、却って之を靈に怪誕なしと謂わざるなり。大凡、三教を論ずる者は、當に糠粃のごとく略去すべし。別に翻身一著を覗むれば可なり。吁、我のみ之を知れり。甕を運ぶ者は、心ず甕外に在り。若し甕中に坐せば、甕を運ぶこと能わず。既に自ら埋没せり、是に於いて、境中に非ざるは、終に之を善と謂わず。三教を説くは、須らく是れ、其れ、長鯨を活捉する底の手段、猛虎を生擒する底の機鋒なり。迥然として三教の表に独脱して、始めて坎井を出でて、東海を語るべし。苟し、区区として前人の咳唾、切紙上の陳言を拾いて、此を是、彼を非ならんと欲するは、其れ、大方の者に笑われざること鮮し。又、一の説書有りて曰く、之を知るに非ざれば、之を行うこと難し。惟みるに、艱は、老病、未だ至らざるの時に当りて、誰も高説闡論し、説心説性し、古人の談玄談妙を毀斥し、人の意表に出すること能わず。十二時中の行持踐履を觀するに及べば、寧ろ、一念の貪愛喜怒の胸中に芥葉するなく、寧ろ、一念の酒色財氣の、正見を聾瞽するなし。夫子の默識一貫、顏子の心斎坐忘、老子の抱一守撲、莊子の鵬鶻逍遙、世尊の拈華微笑、達磨の得皮得髓を仰視せよ。恐らくは古えの聖人、未だ必ずしも是の如きの行持なし。故に夫子曰く、先に行いて、然後に之に従う。言を以て未だ聞かざるは、脚を患うが如し。禪師は、言を能くするも、行を能くせ

す。所以に、雪峰云く、悟了すれば、須らく是れ行持なるべし。

悟了するも、若し行持せざれば、之を乾慧と謂い、生死利害の処に臨みて、終に得力せず。是に知りぬ、多言には在らず、顧だ力めて行ずるとは如何なるかを。古より、三教を鼎分し、相資けて用と為す。正に國家の用兵の如し。豈に已むを得んや。後世の人をして、鄰墻を相い忘れ、相い往来せざるの愆ならしむ。清風の類至り、一に至るも是れ義皇上人があらず。吾、知りぬ、三聖人をして、決して平地上に向いて風波を起さざることを。今人は不古、見地も不古、踐履も不古なるをいかんせん。所謂る、口頭に説きて千般の妙を得るも、脚下は一点の塵も忘れ難し。聖人、曲げて、為に一隻手を垂れざるを得ず。嘗て観るに、宋朝無垢居士張狀元、一たび高科してより後、未だ嘗て禪林の三昧に遊戯せず。忽ち妙喜禪師に朝謁して、格物の旨を論ず。喜云く、公は只だ格物有るを知り、物格有るを知らず。公曰く、師、豈に方便ながらんや。喜、明皇、蜀に幸き、劍を以て閻守の像を擊つの話を挙す。公、之を聞き、頓に玄旨を悟り、遂に偈を作りて云く、子韶は格物、曇晦は物格。一貫を識らんと欲せば、兩箇の五百。果して是れ具眼知音ならば但だ這般の公案を看よ。豈に三教の能く窒礙する所ならんや。然らざれば、更に聴け、乱りに一偈を説かん。

三教の由來、古より之有り。黃葉を將て児の啼くを止むるを休めよ。碧落を衝開す、松千尺。紅塵を截断す、水一匁。硬似綿团軟似鐵。六月炎天一点雪。露柱燈籠笑点頭。啞子得夢向誰説。古來三教強安名。釈迦掩室於磨竭。夫子謂默而識之。老聃謂大辨若納。直饒剖破作一家。不免落在第二月。翻憶東坡居士

言。尽把三教俱漏泄。山色豈非清淨身。渓声便是廣長舌。便恁麼去。非持法堂前。草深一丈至。尽法界无一人堪為種草。縱上聖人。具慈渾悲愍。世流浪不免捺下雲頭於第二門淺近處。誘引諸子使當去古漸遙之時。若不為通一線路。斯民詭譎日甚。且將為魑魅。而不之反。是以三聖人同生。有周主盟正教。儒教教以窮理尽性。釈教教以明心見性。道教教以修真煉性。惟此一事矣。余二即非真是。各人胸中自有三教混然。切不可向外。騎牛覓牛去也。故前輩云。一僧一道一儒流。三人共話幾春秋。不知說箇何年事。直至如今笑未休。此詩渾無一點食煙火氣味。始於三教無負。若曰。齊家治身致君澤民。此特儒者之余事。若曰。嗇精養神飛仙上昇。此特道家之粗迹。若曰。越死超生自利利人。此特釈氏之筌蹄矣。吁一字三写。烏焉成馬。後世伝訛。將謂三教止於粗迹。往往乘虛接響。忘本逐末。但以耳目所可接者。爭是較非。甚至言戰交攻、辭鋒競射。豈不見。聖門有云。我之賢也。於人何所不容。況三教聖人。各有門戶。要其至極處。未始不一。是皆所以不能容人之量。是已非人及言。自己性命者。尽指為虛。無怪誕之語。終日喚叛為真認賊為子。至於每日。承他恩力。一点点子間着全。未有正見正悟。既無見悟。一旦翻身帰去。且道。路頭向什麼處去。転見如癡如醉。不識下落。如是見解。又却不謂之虛無怪誕也。大凡論三教者。當略去糖粃。別覓翻身一着。可也。吁我知之矣。運甕者必在甕外。若坐甕中。不能運甕。既自埋沒。於是而非境中。終不謂之善説。三教者。須是其活捉長鯨底手段。生擒猛處底機鋒。迥然独脫於三教之表。始可出坎井。而語東海也。苟区区拾前人之咳唾。切紙上之陳言。而欲是此非彼。其不見笑於大方者鮮矣。又有一説書曰。非知之艱行之。惟艱當老病未至之時。誰不能高説闡論。説心

説性。毀斥古人談玄説妙。出人意表。及觀十二時中。行持踐履。寧無一念貪愛喜怒芥蒂於胸中。寧無一念酒色財氣顰蹙。於正見仰視。天子之默識一貫。顏子之心斋坐忘。老子之抱一守撲。莊子之鵬鶻逍遙。世尊之拈花微笑。達磨之得皮得髓。恐古聖人未必如是之行持也。故夫子曰。先行然後從之。以言未聞如患脚。禪師能說不能行。所以雪峰云。悟了須是行持。悟了若不行持。謂之乾慧。臨生死利害處。終不得力。是知。不在多言。顧力行如何耳。自古鼎分三教。相資為用。正如国家用兵。豈得已哉。使後世人相忘於鄰墻。不相往来之愆。清風類至。至一不是義皇上人。吾知三聖人。決不向平地上起風波。爭柰今人不古見地不古踐履不古。所謂口頭說得千般妙。脚下難忘一點塵。聖人不得不曲。為垂一隻手。嘗觀宋朝無垢居士張狀元。一自高科之後。未嘗不遊戲禪林三昧。忽朝謁妙喜禪師。論格物之旨。喜云。公只知有格物。不知有物格。公曰。師豈無方便耶。喜舉明皇幸蜀以劍擊闔守像話。公聞之頓悟玄旨。遂作偈云。子詔格物。曇晦物格。欲識一貫。兩箇五百。果是真眼知音。但看這般公案。豈三教之所能窒礙。不然更聽亂說一偈。

三教由來古有之

休將黃葉止兒啼

衝開碧落松千尺 截斷紅塵水一閑

引用が長くなつたが、顏丙は、〔肇論〕に言う「掩室摩竭」も、〔論語〕（述而）の「默識」も、「老子」（洪德）の「大弁如訥」も、言わんとすることは一であり、はじめに三教というワク組みを作つておき、それを突き破つて一つであるというのでは、一義に落ちるというのである。つまり、三教が同

じ内容を説くというのは、それはワク組み以前のものであり、その意味からすれば、儒教で言う「齊家治身、致君澤民」や道教で説く「齋精養神、飛仙上昇」、仏教の「越死超生、自利利人」などの教えは、あくまで二義的な方便にすぎないと断定する。

されば三教とは、仮に名を立てたもので、元來は各人の胸中に混然として有る一なるもので、言葉に執われることなく、ついには、その三教という概念を糟粕のごとく吐き出し、迥然として独脱せよといふ。とどのつまり、理窟を述べるだけではなく、実行しなくてはならぬとし、大慧に参じた張九成の入道の故事を例証に引き、「三教の由来、古より之有り、云々」の偈をもつてこれを結びとし、方便としてでも三教の区別を立てるなどを否定するのである。〔大全語録〕は、さらに「三教無諍頌」として、孔・老・仏の語と、それに対する頌、計六首を載せ、君子、上士、賢人、仏といった人々は、「諍わない」ことが重要であると主張し、〔語録〕丁集卷一では、「儒教五十三頌」「道教五十頌」「釈教一百則公案」を引用して頌を付すのである。

いつたい三教の関係を論じるのは、仏教伝来当初からのことであつて、顏丙独自の発言でないことは言うまでもなく、禅界に限つても、藥山と李翹・大顛と韓愈など幾多の例があり、さらには北宋の仏日契嵩による〔輔教編〕の成立な

どの例がある。例えば「輔教編」についてみると、それは、いわゆる護教論として、五戒と五常の合一を説き、儒は世間、仏は出世間という、その機能の分つべきを説くのである。本格的でかつ綿々密々たる立論は、以後の護法論に多大の影響を与えたともいう。

顏丙が、このような護法論を知らなかつたとは思えない。とは言つても、顏丙は、いわば守りの立場あるいは理論的立場に立つての護法に終始したわけではないのである。

少なくとも顏丙は先に述べたように、三教の区別を離れ、——そこでは三教の帰一が前提となる——しかもそれを実践すべきであるとするのである。それは顏丙の独創と言うより、法祖父たる大慧が、大悟徹底したなら、「儒即釈、釈即禪」（〔大慧書〕「答汪狀元」T.47-932b）であると、枝末の論を無視して、根底を見すえた上でなした言に通じるものがある。

繁瑣な議論をはじめからせず、三教を「一心」をもつて総括してしまうのである。

ちなみに、大慧の交流の中心となつたのが、士大夫と呼ばれる上層階級に属する人々であったことは否定できない。あるいは、大慧自身が、儒教の立場をはなから否定することより、儒仏の一一致を説くほうが穩当であると考えたとも思われるが、しかし、大慧が作為的、便宜的に儒仏一致を主張し

たとは考えにくい。大慧禪の主眼は大悟であり、その前では儒仏の同不同を理論の上で談じる必要はなかつたとみる方が、自然であろう。例えば、大慧の法語で、

士大夫の、曾て仏乗中に心を留めざる者は、往往に仏乗を以て空寂の教と為す。箇の皮袋子に恋著し、人の、空を説き寂を説くを聞けば、則ち怕怖を生ず。殊に知らず、只だ這の怕怖底の心、便ち是れ生死の根本なることを。……吾、仏の教は、密密に至尊の聖化を助揚すること、亦た多し。又、何ぞ嘗て、只だ空寂を説ずるのみならんや。俗に、李老君は長生の術を説くと謂うが如きは、正しく、硬く、仏は空寂の法を談ずと差排すると異なることは、正しく、硬く、仏は空寂の法を談ずと差排すると異なることなきが如し。老子の書、元より曾て留形住世を説かざるも、亦た清淨無異を以て、自然帰宿の処となす。自ら是れ仏老を学ばざる者、好惡の心を以て、相い誣謗するのみ。察せざるべからず。愚謂えらく、三教の聖人、教えを立つること異なると雖も、其の道、同じく一致に帰せり。此れは万古不變の義なり。然も是の如くなりと雖も、無智の人の前には説くこと莫し。爾を打ちて頭破額裂せん。

士大夫不曾向仏乘中留心者。往往以仏乗為空寂之教。恋著箇皮袋子。聞人説空説寂。則生怕怖。殊不知。只這怕怖底心。便是生死根本。（中略）吾仏之教。密密助揚至尊聖化者亦多矣。又何嘗只談空寂而已。如俗謂李老君説長生之術。正如硬差排仏談空寂之法無異。老子之書。元不曾説留形住世。亦以清淨無為。為自然帰宿之処。自是不學仏老者。以好惡心相誣謗爾。不可不察也。愚謂三教聖人立教雖異。而其道同歸一致。此万古不易之義。然雖如

是。無智人前莫説。打爾頭破額裂。

(T.47-906a)

という一段は、如実にそれを表わしていると言える。」のよう三教を包括してしまったという態度が根底にあって、大慧の士大夫接得が成功したと考えうるのではないか。

もちろん、大慧は常に三教一致のみをもつて宗旨とし、前面に押し出していたわけではない。大慧が眼目としたのは二六時中の間断なき功夫による大悟徹底にほかならない。

士大夫の先王の道を学ぶは、止だ是れ心術を正さんとするのみ。心術正しければ、邪非自ら、相い干わらず。邪非、既に相い干わ

らざれば、日用応縁の処、自然に頭頭上に明らかに、物物上に顯わる。心術は、是れ本、文章学問は、是れ末なり。

士大夫学先王之道。止是正心術而已。心術既正。則邪非自不相干。邪非既不相干。則日用応縁處。自然頭頭上明。物物上顯。心術是本。文章学問是末。

(T.47-898a)

右の一段が、禅者としての大慧の発言であることは言を俟たぬし、それがまた、時の士大夫を魅了したことも事実である。大慧にとってみれば、心術を正ならしめ、「此事」を明らめることが全てに優先し、それが一切を包括してしまったのである。

大慧の中国思想界に与えた影響の大なることは、今更言うまでもなく、まだここで論じることもできないが、法孫たる

顔丙が、その影響を当然のこととして被つていて不思議はない。

ただし、大慧の交流の中心となつたのが士大夫層であるのに対し、多分、生涯市井にあつた顔丙の目は、もっと広い分野に注がれているとみてよい。もちろん大慧自身も、

道は在らざること無く、触處、皆な真なり。真を離れて立つ処なし。立処、即ち真なり。教中に所謂る、治生産業、皆な正理に順い、実相と相い違背せず。

道無不在。触處皆真。非離真而立処。教中所謂治生産業皆順正理。与実相不相違背。

(T.47-911a)

として何度かにわたつて「法華經」(法師功德品)の一段を前提にし各祖師の語を例証としつつ、日常と離れて「此事」はないとみるのである。触處は、あらゆる立場階層に及ぶ。ただ、このような立論は、何も大慧に限定されるものではない。この時代の多くの禅者は、現実社会を右のように捉えていたと考えてよいのではないか。

問題は、大慧の影響が士大夫層を中心にして及んだことである。大慧にとってみれば、心術を正ならしめ、「此事」を明べたように、一時的に流謫の身をかこつたにしても、大慧はやはり当代を代表する一流の禅者であることに変りはなく、その意味で、庶民の生活そのもの直接その視野に置き、かつそれを、どのように評価していくかという態度が稀薄である

ことも否めないのである。

この点、顔丙は、いかなる理由で在俗の生活を続けたのかは定かでないものの、市井にあるという面で、庶民感覚は大慧よりも強く、それだけ、「触処」⁽⁹⁾を、具体的日常の中に捉えようとしたものと推測してよい。もちろん語録の上で、顔丙の庶民性が窺われることと、実際に庶民的であったか否か—それは当然、禅の民衆化にかかわる—は別であるが、かりに庶民の生活を知っているだけであつたとしても、それを隠そうとしない顔丙の態度は重要である。

そして実は、この点にこそ顔丙の禅の立場の特色があるとみうるのではないか。その教化の対象が庶民であればこそ、顔丙の禅の通俗性が出てくると思われる。

既述のように顔丙は「周礼」を学ぶことから一転して帰仏し、また三教の説くところは、すべて一心に帰結するとみるのであるから、政治そのものに対して発言することはほとんどなく、かえって、慧遠の「沙門不敬王者論」の書写が、断片ながら、「語録」別集卷二拾遺に収録されているのをみると、「権力の埒外にある仏教」の立場を前提にしていたものと推察できる。ただし帰仏したといつても、終始在俗の立場を堅持した顔丙は、決して儒教的倫理を否定しない。あるいは儒教的倫理も尊重するが故に、出家しなかつたとも考えうる。

〔語録〕甲集卷一、「勸孝文」の一節をみよう。

以上だけでは、一般的の「孝」重視の立場と変ることはなし、引用の例も特に目新しいとは言えない。しかし注意すべ

鞠育の恩、深大なること天地の如く、劬勞の徳、厚重なること丘山の若し。碎身粉骨するも、能く酬ゆるなく、亘古窮今するも、尽く説き難し。所生と所養とを別つを休めよ、本来、後なく先なし。須らく堂上の老親、便ち是れ人間の生仏なるを知るべし。況んや、親は乃ち一身の本にして、孝は百行の先なり。親に非ざれば、則ち身、何れより来る。孝を捨てれば、則ち行の取るに足るなし。觀音菩薩は、断臂して妙莊父王を救い、釈迦如来は、法を摩耶仏母の為に説く。玄沙、出家するに、父、來りて徳を謝し、目蓮、仏に投するに、母、天に生ずるを獲たり。吾が夫子、孝經の言を述べ、許真は、君忠孝廉の挙あり。古より、真に三教を尊び、心を推して常に二親を念う。既に今人と作る。宜しく古訓に遵うべし。幼羊は跪きて乳し、尚お母を敬う知る。慈鴉、哺を返して、親に孝なるを忘れず。物すら尚お斯の如し。人、胡んぞ爾らざらんや、云々。

鞠育恩深大如天地。劬勞徳厚重若丘山。碎身粉骨莫能酬。亘古窮今難尽説。休別所生所養。本来無後無先。須知堂上老親。便是人間生仏。況親乃一身之本。而孝為百行之先。非親則自何來。捨孝則無足取。觀音菩薩断臂。救妙莊父王。釈迦如來說法。為摩耶仏母。玄沙出家。而父來謝徳。目連投仏。而母獲生天。吾夫子述孝經之言。許真君忠孝廉之挙。自古真尊三教。推心常念二親。既作今人。宜遵古訓。幼羊跪乳。而尚知敬母。慈鴉返哺。而不忘孝親。物尚如斯。人胡不爾。

きは、母の恩徳に言及する中で、次のように言うことである。

る。

初め子を生むに、且らく地神を触汚し、血池、已に陰司に積む。業果、異日に逃れ難し。此に大藏經の文もて、具さに載せん。宜しく、小心の男女、遵依して血盆三載の斎を持ち、母氏をして百年の罪を免れしむべし、云々。
(且々)

初生子。且触汚地神。血池已積於陰司。業果難逃於異日。此大藏經文具載。宜小心男女遵依。持血盆三載之斎。免母氏百年之罪。

右は多分「血盆經」の、「惟有小心孝順男女、敬重三寶、更為阿娘、持血盆斎三年、仍結血盆勝会、云々」(Z.1-87-4, 299a)の一節を前提にしたものであろう。今日的立場からみれば、まったく前近代的内容を持つ、偽經「血盆經」の成立や流傳についても、未解決の部分も多い。⁽¹⁰⁾ この小論は、「血盆經」そのものを扱う目的としていないので、今後の課題としなくてはならないが「語錄」では、都合三箇所において「血盆」について言及されるから、顏丙にとつて、女性と「血盆經」との結びつきは、必須のものであったことは疑いない。

その問題はしばらく描くとして、両親へ孝を尽すことは、上は竜天を感動し、下は人口に膾炙す。今生今世、神明、常に吉祥を降し、他日他時、菩薩、永く伴侶為らん、云々。上感動於竜天。下膾炙人口。今生今世。神明常降吉祥。他日他日。菩薩永為伴侶。

という功德もあるのである。

孝を尽すことが、儒教倫理の根本であるから、生前の両親には孝を尽し、死後には追善を行うという顏丙の立場は「孝」を重視するという一点において、極めて儒教的であると言えよう。「語錄」の内容を一瞥しただけでも、葬送や追善への深い配慮のあることが窺われる。

当然そこには、淨土教も含んだ、禪における葬祭の立場と、孝思想を裏付けとする儒教の葬祭との融合があるとみてよい。あるいはそこに道教を加える必要があるかもしれない。

この点についても別に論ずるものとするが、いわば、顏丙における葬祭重視は、そのまま禪淨・三教を総合した立場そのものと言えよう。

次に道教への配慮も見ておく必要がある。この場合、当然ながら顏丙がいわゆる教団道教の人々と交渉を持ったことは全く窺われない。あえて「語錄」丁集卷二の「道教五十頌」をもって、その手掛りとしたとしても、引用される道教の故事は中国人としては、既知のこととして特に関心を寄せるほどのものではなかつたと思われる。ちなみに引用される故事は、老子の六則を最高に、鍾離の三、呂洞賓・齊丘の各二などが続き、他はすべて一則ずつとなつてゐる。これらの選択の基準は、既述のように、一心にかかわるものという視点で

なされるのであるから、当代における道教教団の動向とは隔絶していたとみてよい。

ただし、民衆道教となるとまた別である。まず「語錄」丙集卷三の「聖誕疏門」では、釈迦・阿弥陀・觀音などの誕生日と肩を並べて、「老君生日」「真聖生日」「純陽真人生日」が祝われている。太上老君は二月一五日、真武大帝は三月三日、純陽真人呂洞賓は四月一四日にその生日が指定されているから、当日は顏丙もその廟などへ参詣したものと思われる。太上老君は老子が神格化した結果であるが、五世紀、寇謙之によつて道教の最高神となつたものの、のち六世紀の陶弘景（四五六～五三六）による「真靈位業圖」では、第四階位の主尊として位置付けられている。ランクは低下したもの、少なくとも顏丙にとつて化胡説のゆえに老子の立場は大きい。

次の真武大帝は、北斗星の神格化したもので、道教武派の守護神として重視され、靖康元年（一一二六）に「佑聖真武靈應真君」に封ぜられるという。時あたかも、北宋末期であり、以後、南宋は、常に北からの侵入に備える。武の神を祀ることも、南宋の人々にとつては、重要な任務となつていたのではないか。

さらに、呂洞賓は、民衆道教では、願いを必ずかなえてくれる神としては信じられていたといふ。

これらの背景からみれば、庶民とともに生きた顏丙が、民衆道教の神々の生日を祝うのも当然と言えよう。
その一には触れないでの、とり合はず「老君生日」の場合をみておこう。

恭しく惟みれば、通德天尊、生は無始よりし、道は非常と曰う。色雲に駕して玉女の口中に入り、月晶に乗りて天竺国内に下る。姓は李氏に彰われ、周王に代属し、後、身は復して釈迦と現わる。問礼は、猶、夫子に聞く。八十一の教主、百千万劫の道師にして、三清に列し、各おの九位を尊ぶ。茲に、柳融花暖、点中の春を紹い、燕語鶯啼、誕節を歎呼す。事えて恭虔の志を竭し、少しく慶讃の儀を伸べん。

恭惟通德天尊。生從無始。道曰非常。駕色雲而入玉女口中。乘月晶而下天竺国内。姓彰李氏。代属周王。後身復現釈迦。問礼猶聞夫子。八十一の教主。百千万劫之道師。今列三清。各尊九位。茲者柳融花暖。粧点中春。燕語鶯啼。歎呼誕節。事竭恭虔之志。少伸慶讃之儀。

ちなみに、神々の生日を記した「玉匣記」では、数多くの道教神の生日が記され、さらには、釈迦の生日・出家・成道はもとより、弥勒仏、定光仏、觀音、普賢、文殊、慈祐、勢至、地藏、燃灯仏、自在、藥師瑠璃光王仏、達磨、普庵印肅などの生日も祝われるから、その意味では、顏丙が道教神を祀る範囲は、限定されたものと言えよう。しかも浴仏や、阿弥陀、觀音、華光菩薩の生日を祝う疏文には、道教的色彩は感

じられないから、重複していると言つても、この場合には道教色はないとみてよい。

ただ注意してよいのは「語録」乙集卷四の「薦亡答上界」「薦亡答中界」「薦亡答下界」、三段の存在であろう。顔丙が孝の実践として薦亡追善を重視したのは、先に述べたとおりである。それなりに現実的な功德もある薦亡追善を顔丙がどのように考えていたかについては、稿を改める必要があり、ここでは詳しく論じえないのが、ともかく、顔丙は、薦亡の功德をもつて上中下三界の各尊に回向しようとも考えたのである。「薦亡答上界」の例をみよう。

仏海に遊ばんと欲せば、須らく般若の舟に乗るべし。將に天宮に往きて、必ず菩提の道を指すべし。然れば上来の功德を将つて、用つて上界の三清、上聖の四帝、至尊の二后、高貴なる十華仙衆、日宮月宮の天子、南斗北斗の星君、十二宮神、二十八宿、三官九曜、四聖五帝、四天の四王、五方の五帝、満天の参佐、合漢真鄉、事并灯王、本命元辰、臨運の星衆に莊嚴資答し奉る、云々。欲遊仏海。須乗般若之舟。將往天宮。必指菩提之路。然將上来功德。奉用莊嚴資答。上界三清。上聖四帝。至尊二后。高貴十華仙衆。日宮月宮天子。南斗北斗星君。十二宮神。二十八宿。三官九曜。四聖五帝。四天四王。五方五帝。満天參佐。合漢真鄉。事并灯王。本命元辰。臨運星衆。

下界の神々が、「地獄」を予想しているらしきことは推察できるが、それにしても、上中下界への神々の配当が、何に依拠しているか定かでない。先の「真靈位業図」の配当と異なることは言うまでもなく、現時点では顔丙が恣意的に列挙したとみてよいのではないだろうか。⁽¹⁾あるいは当時の民間では、このような世界観が行われていたのかもしれない。

もう一つ、民衆道教との関係で言うなら、「語録」乙集卷三の「一年景散語門」の存在がある。

中国における民間の習俗が、実は道教に由来することは、指摘される部分もあり、筆者も禅者の因事上堂と習俗の関係について若干の私論を発表したことがある。⁽²⁾それらを踏まえてみれば、この時代、いかに超俗の禅者であっても、もはや世俗と無縁の修道生活を行うことは至難のことであった。かえって、さまざまな社会的立場から出家した数多い大衆に対

して、禅の立場から、どうそれらを意味づけるかに腐心したかを物語る上堂語が少くないものである。

ひるがえって、顔丙の場合、習俗をいかに禅の立場から評価し、集約するなどという、いわば力みの姿勢はほとんどない。それはほどんど庶民の感覚に同じしたものと言えるであろう。

かりに、「一年景散語門」の後半、正月より一二月までの各月に配当される語をみても、——多分それは各月の朔日に作られたのであるが——内容は、季節感に溢れてはいても、それだけ宗教色は薄いように思われ、かえつて末尾に付される、「用つて法事を陳ぶ」とか「宜しく善果を修すべし」などの語が、からうじて、居士としての面目を保つとさえ言いうると思われる。

つまり、顔丙にとって、道教的色彩は、仏教との関係において、特に積極的評価の対象とはなりえないにしても、それを否定的みていくほど、忌避すべき対象でもなかつたのである。

う。

その流布は、明清代に本格化するが、多分、顔丙はまだ功過格を知らない。

かえって、陰徳を積むことは「好處受生、不墮三途、永超六趣、上生天界、不失人身」という結果を生み、菩薩となり、神仙になりうると言うのである。善行の結果も、右に準ずるとみてよい。ここにも、顔丙の禅の融合性、通俗性を見出しうる。

注

(1) 「如如居士語録」の大綱を知るために、その目録を次に記しておく。○印を付したものは、明初刊「如如居士三教大全語録」に共通する。なお原則として、各巻首に付される目次に遵うものとしたが、文言や順などで内容と異なる場合は、内容を優先した。また第三冊の末尾には相当な錯走があるが、この場合目録に従つた。

如如居士語録甲集目録

卷之一

諸文門上

- 見性成仏直指 ○普勸戒殺生文 ○普勸發心文 ○勸孝文
- および「回向向善」の二項を立てる。勸善というということになれば、道教で言う「功過格」の存在も気になる。窪徳忠

〔道教史〕の成果によれば、功過格の先駆とも言うべき、「太上感應篇」の成立は、北宋末から南宋にかけてのこととい

○焼三界夜香文 ○仏前焼香文 ○広行陰徳 ○広行陰徳

卷之二

諸文門下

○回向向善 ○広眼語 ○藏眼両辺語 ○東嶽藏眼輪廻凶

○入道能学仏 ○菩薩教人念佛 ○天道 ○修羅道 ○人道

○畜生道 ○餓鬼道 ○地獄道 ○仏道 ○初学坐禅法

卷之三

伝灯門

○仏祖伝灯藏經摘要 ○七仏偈 ○二十八祖師偈

○唐土六祖偈 ○南嶽讓和尚偈 ○江西馬大師偈

○釈迦仏總偈 ○五家宗派

卷之四

証拠門

可庵印証頌 輝光頌二首 舒老和可庵頌 開元即庵頌二首

雪峰東嘉贊 廉貢士贊

詩頌門

題庵嶼 題一松軒 題白蓮軒 詠石泉 題月巖 坐禪去昏散

病 贈成禪人住五台 贈張道參禪 自頌 參可庵帰頌 戒殺

頌二首 答建寧嚴居士二首 贈建寧李長者二首 贈建寧吳居士二

首 贈住休庵 贈雪峰化士 詠鏡二首 送二人行脚 送倪道

人遊山 送積慶受戒 送円通受戒

如如居士語錄乙集目録

卷之一

音声仏事門

初入壇語 凡三段 三帰依讚語 祝香語 安慰語 濟淨語

陳意語 召請三界語 七供養 又七供養 観音贊語 観音贊

又讚 讀觀音巧箋筆

散華文并偈

南宋における一居士の精神生活（永井）

保安 薦母 乞巧 祈男 櫛髮 祈蚕 奉道

卷之二

放生科儀門

放生文 放生科儀

施食門

施食文 施食科儀

卷之三

陳意門 散語

解結 血盆 還願 瘑災 送星 瘑火 生日 保病凡二段

保胎二段 修造住宅墳 祈雨 謝雨 祈晴 祈雪 謝雪

祈男 謝男 保蚕 保苗

一年景門 散語

新歲二段 上元 重五 七夕 中元 中秋 重九 正月

二月 三月 四月 五月 六月 七月 八月 九月 十月

十一月 十二月 閏月

卷之四

廻向門

薦亡

保安 薦亡答上界 薦亡答中界 薦亡答下界

引亡魂入洛門

引文 引亡魂科儀

卷之五

疏意門

追薦

父母 夫妻 兄方 男女 丈人 丈母 女婿 婆

伯叔 姉妹 総薦亡

卷之五

涅槃門

秉炬

春 夏 秋 冬 男 女 老人 少年 僧 道 士
擎棺 掛真 撤灰 擎棺 起龕 擎哀 入塔 二僧入塔
掛真 女人擎棺

卷之六

諸家伏願門

官員二段 僧道二段 士人二段 婦人二段 小兒二段

保病二段 薦亡二段 祈男二段 事出 買壳二段 老人二段

士 農 工 商 總願 靈王 存亡父母

拋偈門

平安 薦父母 薦父 薦母 薦父 薦妻 薦兄方 薦男

薦女 薦大人 薦大母 薦女婿 薦婆 薦姊妹 總用 薦僧

血盆

△以上第一冊▽

如如居士三教語録丙集目録

卷之一

修礼六時淨土文門

日初時 日初時讚淨土偈 日中時 日中時讚淨土偈 日沒時

日沒時讚十二光仏偈 初夜時

初夜讚自性阿彌陀仏四十八願偈 中夜時 讚中夜偈

夜後時 讚夜後偈

見尊宿門

見雪峰庵 見府中即庵 見雪峰一大禪 見福泉尊宿

卷之二

泉州講經門偈頌

第一日偈 二日偈 三日偈 四日偈 五日偈 六日偈

七日偈 八日偈 九日偈 十日偈 十一日偈 十二日偈

十三日偈 十四日偈 十五日偈 十六日偈 十七日偈

十八日偈 十九日偈 二十日偈 二十一日偈 散講日普說偈

泉州二尊宿跋

卷之三

聖誕門 故語

浴仏 資聖浴仏 弥陀生日 觀音生日 觀音生日 老君生日

真聖生日 聖帝生日 華光菩薩生日 純陽真人生日

化抄題門

結華嚴會 題華嚴經 題雕註經 題生七 題四緣會

列弥陀會 題寶林會 題金剛會

孟蘭盆会 礼目蓮菩薩會 如意會禮懺 題孔雀經送星辰

水陸裝功德 宝峰題香燈 題四月八

伏願門

上乘伏願 伏願懺悔

卷之四

開堂疏門

請龍婦長老住員庵 請白長老住報恩 請明上座住新庵

請人住円照庵 請照長老住鳳山 預修開堂請禪定

請慈恩長老墜座

披剃門

化人披剃 又化披剃 倪道人披剃 度僧語彌陀剃錢 披剃

化法衣門

化三衣 化水陸法衣 化百衲 夫妻剪髮化衣

水陸門

水陸表懺 金剛会 普濟会 生七 薦母并媳婦首七課經建灯

孫薦公百日薦婆六七礼九 薦母百日礼九品

薦子六七母四七礼懺 二孫薦祖母林母礼懺建灯

父母薦女礼觀音懺

卷之五

化緣起造門

化仏殿 聖霞岩起殿 化庵基 起小庵 石庵 了庵造樓閣

起華嚴閣 靈應岩結傍結蓋灰飾 平政橋庵建寧府 鐘樓化瓦

建修大殿堂樓閣 化觀音堂城隍廟 修庵橋

雜化門

修天明輪藏 粧仏画壁 同前 同前 懺橋 宝月長老五七

五通生辰水陸疏 女薦父礼弥陀 薦母夫薦妻三七建灯

化茶 化塩 化鍋 化浴 化布帳

化齋糧門

化齋供僧 化糧供僧 化米 化供

化橋路門

化造溪橋 小溪化造橋 建橋 懺橋 結路

如如居士三教語錄丁集目錄

卷之一

頌儒教門

儒教五十三頌 (細目ハ略)

卷之二

南宋における一居士の精神生活 (永井)

頌道教門

道教五十頌 (細目ハ略)

卷之三・四

頌釈教門

釈教一百則公案 (細目ハ略)

卷之四

三教論門

○三教一理論

三教無諍門

○君子無所爭 ○上士無爭下士好爭

滅得無諍三昧 於人何所不容 水善利万物而不爭

割身為忍辱仙

敬僧門

○敬僧文 ○敬僧偈

(卷四ハ本来ナラ五トナルベキデアルガ四トシ、サラニ目次
ノミニテ原文ヲ欠ク)

△以上第二冊▽

如如居士增入丹霞先生語錄戊集目錄

卷之一

諸論世文門

勸回心省悟文 証心文 鑑誠殺生因果文 警世誠酒色文

論世報応文 述燕子比論世文并偈 述蜜蜂鑑世文

吊破灯壽論人文 勸人莫做生墳文 詠送葬文

勸諭富貴之家儘好布施 誓莫使兩般□□瞞人

勸諭莫虧心輕惑人 勸諭交閔須要分別

卷之二

論世詩偈歌頌門

嘆浮生歌十首 嘆生老疾死苦偈五首 論世詩

警文房四宝論世詩四首 論賃屋人覓語頌六首

誠殺祝寿詩五首 誠人莫認仮為真四首 劍人莫論訴

普誠倡戶

卷之三

論世詩偈歌頌門

普勸世俗詩頌二十一頌 詠士農工商四偈 偲贈相撲人

偈贈綵帛鋪 偲贈樂人 偲贈壳螺蟬人 詠丐者

卷之四

論世偈頌門

喚人知覺頌 誠僧莫妄想頌 述懷論世頌 感中而作鑑世

春遊西里有感而作論世 貪酒頌 誠酒 愛色頌 誠色

積財頌 誠財 爭氣頌 男人觸體頌 女人觸體頌

小兒觸體頌 小女觸體頌 和尚觸體頌 道士觸體頌

文武人觸體頌 警世臨江山

卷之五

偈頌門

贊洪鍾偈 贊湯瓶頌 贊茶磨頌 題生仙觀示諸道友四首

訪石門寺詩頌 訪深山陳侍者三首 訪徒上座

誠天下医士偈頌 寡婦為亡夫覓頌 為和尚下火頌

為医官下火頌 為范家女子下火頌 為宰殺人下火頌

為喫酒人下火頌 為妓女下火頌 為船甲頭下火頌

西江月戒莫張羅捕飛禽 劸修真座右銘 善人諭 惡人諭

卷之六

論世歌頌門

警牛頌 警猪頌 警犬頌 頌 警雞頌 警鵝頌

林泉通達偈二十首 悟了歌 莫射飛禽莫殺水族歌 起橋疏

砌路疏

如如居士語錄己集目錄

卷之一

修行方便門

- 士大夫方便修行 ○在家人方便修行 ○武士方便修行
- 公門方便修行 ○医者方便修行 ○工巧技術方便修行
- 辛苦人方便修行 ○婦女人方便修行 ○老人方便修行
- 少年方便修行 ○屠者方便修行 ○娼門方便修行
- 出家人方便修行 ○參請人方便修行

卷之二

道积三藏經善惡報門

- 酒戒畜不肯戒酒○姪戒畜不肯戒姪○五戒○五欲色酒財氣名
- 十惡○善報○惡報道藏○惡報枳藏○惡報并善報附末

卷之三

齋疏門

- 預修齋疏○四緣會○放生会疏○放生散語○放生疏○彌陀齋疏
- 彌陀生日齋○淨土會齋疏○青果社朝岳疏○齋疏凡五段四緣會
- 吉凶灯疏門

○移葬父母○寶峰上元後日○薦女婿○上元日○薦母小祥

○灯疏○薦父五七 ○開華嚴經

卷之四

詰牒門

○生七語○同○六縁会牒○四縁会牒○中元薦亡牒

○金剛会過牒語○募衆礼阿育王塔牒○懺血盆牒○生七牒○還願

○保安○禳災○薦長子溺水○七七

序跋諸語門

○試經跋○普門品經跋○仏頂心經跋○施普門品經跋

○張孝祥写經跋○贈徐道鑒髓救母

致語門

○中元迎聖者○迎聖者○迎大明庵聖者○迎聖者獻香致語

如如居士坐化語錄目錄 別集

卷之一

愈聞中序 請疏 受疏

卷之二

○入院開堂疏○晚出宿詩礼堂

卷之三

偈頌門

○至節上堂○二月上堂○三月上堂○四月八浴仏○戒文○剪髮

○宝峰題石庵○化鉄灯樹○偈頌○創庵疏○拳旧公案

卷之四

六道輪廻門

○天道○人道○阿修羅道○地獄道○鬼神道○畜生道

卷 五

薦拔門

薦水府疏 子薦母県主五七水陸疏

女婿薦丈母県主六七水陸 拳棺 下火 撒土 掛真

南宋における一居士の精神生活（永井）

諸般廻向門

廻向三寶聖衆 回向一切護法聖賢 回向本命元辰

廻向一切神衆 廻向声聞緣覺 回向亡過父母 回向在堂父母

六道総回向 回向天道 回向人道 回向修羅道

回向地獄道 回向餓鬼道 回向畜生道 回向自己

△以上第三冊▽

以上よりみれば、三教論・敬僧門を除いて「語錄」が、顏丙の語を、一應集大成したものと見てよい。「增続伝灯錄」巻一所収の顏丙の頌二首も、ともに「語錄」丁集巻三に収録される。但し、「龍舒増廣淨土文」巻一二の「獅子峰如如顏丙勸修淨業文」(T.47-286b)の一節は、長文ながら、「語錄」に収録されていない。ちなみに、顏丙の「初學坐禪法」には、これで三種の伝本が存在することとなつたが、相互に文言の異同のあることは否定できない。また「初學坐禪法」が、抜萃して行なわれたのは、その内容が大悟徹底を重視する臨濟禪の立場から歓迎されたからと思われるが、一方、無著道忠「禪林象器箋」(九、叢軌門)「坐禪」は、十余の坐禪儀を列挙しつつも、顏丙の坐禪儀には触れていない。顏丙の禪をめぐって評価は定まらなかつたものと思われる。

(2) 日本への伝本の所在は、椎名氏の指摘される東福寺普門院

のほか、建仁寺兩足院のもの（洪武の刊本一冊——これは洪武一九年刊の「三教大全語錄」であろう。——と、写本一冊）がある。周知のように「大正大藏經」(目録巻三)は白石虎月「東福寺誌」を底本とする。つまり顏丙の語錄は聖一国師円爾（一一〇一一一八〇）による将来の可能性が強い。

円爾は、嘉禎元年（一二三五）に入宋して、痴絶道冲・笑翁妙堪・石田法薰・退耕德寧などに歴参し、破庵下の無準師範に得法している。その活動の範囲は、多く浙江省であり、福建に至ることはない。とすれば円爾の帰朝する仁治二年（一二四二）以前には、顔内の語録が、浙江の人々にも知りうる存在としてあつたことが分る。但し、この場合も、それが禅者達に対して、大きな影響力を持つまでにはいらなかつたと思われる。

(3) 拙稿「南宋禪林と中国との社会風俗——如淨録・虛堂録の因事上堂をめぐつての試論」（曹洞宗研究紀要一三一—六）

(4) 王安石については、夙にさまざまな立場から論じられており、贅言を要しない。また朱子は、王安石の治績・学問・思想・人柄の全てをよくは云わないという（吉川幸治郎・三浦国雄「朱子集」P.397）。とは言つても、顔内が積極的に王安石を評価したとも断定しえない。〔語録〕丁集卷一「頌儒教門」での評価は、王安石よりも、程子の方が高い。従つて、顔丙の先人評価は、各個人の政治や思想そのものへのものではなく、あくまで、一心——心情的なものを含めて——にかかわつていたと思われる。

(5) 居士のままで上堂することは、例のないことではない。本学大学院小川隆氏の御教示によれば明末の袁宏道（一五六八—一六一〇）「金屑篇」にもみられるといふ。ただ、南宋でこのような例が他にあつたのかどうか。あつたとしても、かなり例外的のことであつたのではないか。また「語録」丁集の

編者として、「住獅子峰參學小師、僧慧進」などのあるをみると、居士に僧が参考し、その語録の編集を行うことも珍しい。

(6) 「語録」己集卷三「吉凶灯疏門」では、父について「薦父五七」があり、

亡考某人、塵世に向居すること、方に寿六十二年、今、泉台に返ること、俄かに三十五日を経、云々。
と述べる。母については「薦母小祥」で、

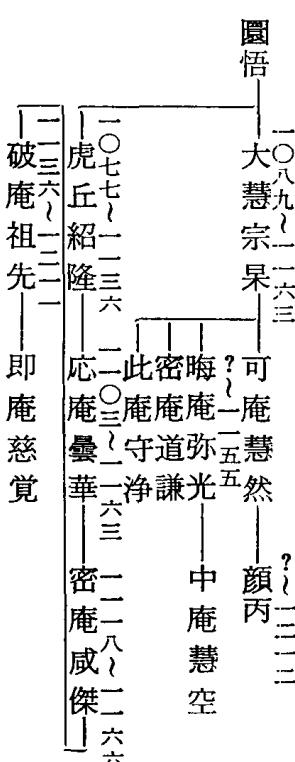
亡庶母某人、淑徳瑕なく、善根、素有り。嗣を伝うこと、幸いに四子を生む、云々。

と述べ、引き続き所収の「灯疏」で

某人、閻浮の世に生れ、婦女の身を現じ、世寿七十八年を享く、云々。

とある。女婿の死は「薦女婿」で推察でき、また、同巻「誥牒門」には「薦長子水溺」がある。推測が許されるなら、顔内が得法の後、故郷で隠棲を続けたのは、あるいは両親、特に母親への孝養の故であつたかも知れない。

(7) 便宜的に、顔内をとりまく禅者の法系を示すと次のようになる。



(8) 「輔教編」の思想史的立場などについては、荒木見悟氏の

労作がある。同氏訳注「輔教編」(禪の語録14) 参照。

(9) 「法華經」(法師功德品)の原意は、「法華經」の真義を悟った者が、さまざまに法を説く時、所説の法は実相と違うことなく、仮に俗書・経書・治世の語言・資生の業を説いたとしても、すべて正法に順うというものである。ここでは、「法華經」の原意を悟ることが前提の条件となるが、禪者、例えば雲門文偃が「經中道。一切治生産業。皆与実相不相違背」(T.47-574b)などと述べ、また大慧が、「又云。治生産業。皆順正理。与實相不相違背。但只依本分。隨其所証。化其同類。同入此門。便是報仏深恩也」(T.47-895a)と発言する時、それは「法華經」の立場を前提としつつも、「法華經」を離れたものとみることができよう。

そのに、職業別に、それぞれ修行の方法を説くのは、「龍舒増廣淨土文」卷六にも見られるもので、顔丙のみの立場とは言えないが、と言って職業の別を意識した修道を説く語録が他に存するわけではないから、王日休や顔丙の立場は、やはり特異な部に属するとみてよい。王日休の場合は、士人より室女に至るまで三六の職種について、終始念佛を勧奨している。顔丙も職種によつては念佛を勧めるが、懺悔でよしとする場合、参禅を勧める場合もある。機根に対する配慮が深いとも、禅として徹底を欠くとも言えるであろう。なお王日休の立場については、小笠原宣秀「宋代の居士王日休と淨土教」([結城教授頌寿記念佛思想史論集]所収)を参照されたい。また石井修道「大慧禪における禅と念佛の問題」(藤吉慈海編「禪と念佛」所収)も、多くの示唆を与える。

(10) 「血盆經」について、江戸時代では本邦成立説が行われて

いたらしい。(杉本俊龍「洞上室内切紙參話研究並祕錄」三九頁)。しかし、ミシェル・スマッシュ「血盆經の資料的研究」[道教研究一]の詳細な論考によつて、その説が誤りであることが確認でき、またその民俗学的研究(武見李子「血盆經の系譜とその信仰」[仏教民俗研究三])もある。ところで、スマッシュ氏は、「血盆經」の成立に言及して、「孝感冥祥錄」の注文の中に「唐建陽の書林范氏が板本にし」た旨が記されていると指摘しつつ、その事実に疑義を呈している(同書 P.129)。筆者もそれ以上には論じえぬが、「血盆經」の成立の遡及しうる上限が、「語錄」を手掛りとして一九四四年と見なしうるなら、同じ福建の地で、刊行された可能性もないとは断言しえないかも知れない。但し、顔丙が「此大藏經文具載」と言うのは、具体的な「大藏經」をさすのではなく、あくまで經証の権威を高めるためであらう。また、大淵忍爾「道教儀礼」([中國人の宗教儀礼] P.637)には、「血湖科儀」が収録される。スマッシュ氏が仏教の影響によつて道教側で成立したとされる、道教の血盆儀礼が、現在も台湾で生きていることが知られる。

(11) 「真靈位業図」の神々や、その役割については、石井昌子「道教の神々」([道教] 1所収)に詳しく、この小論も、多くその成果に拠つた。

(12) 道教と中国の民間習俗をめぐつては、すでに先達の指摘も少なくなく、最近では、中村裕一「道教と年中行事」([道教] 2所収)がある。前掲拙稿。